

東海地区市民活動センタースタッフ交流会 第2回 開催報告

『(仮名) センター・スタッフ・サロン』

【1. 開催概要】

日時：2016年 6月20日(月) 19:00~20:45

会場：一宮市市民活動支援センター (〒491-0858 一宮市栄3-1-2 i-ビル3階)

対象：東海地区の市町の間支援センターの関係者

テーマ：『『寄り添う』支援って、どんな支援?』

参加者数：30名(運営スタッフ3名+一宮センター5名含む)

〈参加者の所属(五十音順)〉

- ・あま市市民活動センター
- ・安城市民交流センター
- ・岩倉市市民活動支援センター
- ・ぎふNPOセンター
- ・岐阜市市民活動交流センター
- ・郡上市市民協働センター
- ・コミュネット江南
- ・多治見市市民活動交流支援センター
- ・知多市市民活動センター
- ・津島市役所市民生活部市民協働課
- ・名古屋市市民活動推進センター
- ・日進市にぎわい交流館
- ・東大手の会
- ・扶桑町住民活動支援センター
- ・みえきた市民活動センター

【2. プログラム】

時間	内容
19:00	開会、趣旨説明
19:10	1. 話題提供「《寄り添う》支援とは？」 話題提供者：一宮市市民活動支援センター ジェネラルマネージャー NPO法人志民連いちのみや 理事長 星野 博氏
19:45	2. グループワーク《一宮のセンタースタッフを囲んで意見交換》 3グループに分かれ ①参加者自己紹介と②意見交換
20:40	閉会、各種アナウンス
20:55	会場移動→懇親会 →星野さん経営の市民活動家の拠点・地ビールレストランで懇親会！ 会場：com-cafe 三八屋 (一宮市本町4-1-9)

【3. プログラム進行の様子】

1. 話題提供「《寄り添う》支援とは？」

話題提供者：一宮市市民活動支援センター ジェネラルマネージャー

NPO法人志民連いちのみや 理事長 星野 博氏

市民活動に携わった経験の少ない参加者が、市民活動を行っている人々・団体に『寄り添うこととはどういうことか?』を考えるヒントを得てもらうため、星野氏より、約30年にわたるまちづくり活動への想いと、一宮市市民活動支援センターの特徴等をお話いただきました。

(星野さんのお話の要旨はP.4)

その後、本会の企画者斎藤氏とのQ&A形式で『寄り添う支援』について掘り下げました。

質問①

「センターのハードとソフトとの関係性は？」

質問②

「センター機能の一つ『翻訳活動』とは？」

質問③

「『アウトリーチ活動』についてのお考えは？」

質問④

「『寄り添う支援・伴走支援』とは？」

質問5

「センタースタッフとして働く上の注意点は？」

(Q&Aの要旨はP.5～6)



〈星野氏と斎藤氏 Q&Aの様子〉

2. グループワーク

★テーブル1：センター長 星野さんを囲んで（運営サイド・市民活動家からの視点を学ぶ）

★テーブル2：市民協働課主任 川合さんを囲んで（行政の立場からの話を聞く）

★テーブル2：スタッフ 川野さん、安田さんを囲んで

（一宮センターにおける団体との付き合い方を学ぶ）

上記3グループに分かれ、一宮のスタッフへの質問及び、意見交換が行われました。

いずれのテーブルも《地域の団体と接点を持ちたいけど、どうしていいかわからない…》《市民活動団体に寄り添うってどんな距離感?》などなど、日ごろのモヤモヤをざっくばらんに語り合い、大いに盛り上がりました。約20分でテーブルチェンジ。閉会まで話は尽きず

「団体との距離の取り方や、『翻訳』のお話が参考になりました」

「もう少し、同じメンバーで話せたらと思いました」

「次回も同じテーマでよいぐらい！ 話したりなかった、もっと深めたかったです」

などの意見をいただきました。



〈グループ①の様子〉



〈グループ②の様子〉



〈グループ③の様子〉

【4. 次回予定】

2016年12月頃に第3回交流会を開催予定

【5. アンケート結果】

別紙

以上

話題提供「《寄り添う》支援とは？」 星野 博さんのお話：要旨

現在、一宮市市民活動支援センターが位置するビルは、JR 一宮駅に隣接し、図書館や子育て支援センター等の施設が同居する絶好のロケーション。これほど恵まれた場所は市民活動のセンターとして必要はないと自分は考えるが、この立地の良さで受ける恩恵がかなり大きいのも事実。

自分は、1990年代から一宮伝統の七夕まつりを市民側から盛り上げる自主企画（『ラブたな』企画運営：七夕まつりを愛する志民の会）や、市民手作り文化祭り「杜の宮市」（2001年～）を企画運営し、30年近く、一宮のまちづくりに関わってきた。そのため、支援センターの指定管理を始めた2012年ごろには、一宮の市民活動をほとんど知り尽くしていると思っていた。しかし、それは自分の慢心であった。

自分が市民活動を行う想いとしては、産業の発展に比べて遅れている市民活動、成長がゆがんでいる市民のまちの活動が、どんなふうにも外と交わり、小さな活動がたくさん生まれて活発になっていけるのかを常に念頭に置き、まちのデザインを考えながら活動を続けてきた。この新センターができたことにより、自分が知らなかった活動があることがわかったし、市民活動をやりたい人が集い、新しいものが生まれていく。それが、好立地による大きなメリットであると思っている。

半面、場所が良すぎることによる苦勞も大きい。駅隣接ビルで、しかも部屋の利用料はタダ、駐車場も利用者は2時間無料、印刷も安価等であるため、ビジネスセクターの人々が目をつけ、表向きは市民活動を装ってやってくる。

それに対し、センターのスタッフたちは常に

「《公共性》とは何か？」

「《公益性》《公開性》《自立性》って、何だろう？」

と自問自答し、日々悩みながら一つ一つ解決し、業務を積み上げてきた。それはかなり厳しい戦いだったが、その作業により、『公益概念』『新しい公共』（この言葉は古いかもしれないが…）について考える練磨を行ってきたと思っている。行政に対しても、その作業を通してセンターの理念・スタンスについてシグナルを送り、市もそれに応えてくれた。スタッフが続けてきた厳しい戦いは、市民と行政がともにこの地域における『公益概念』の基準を創り続けてきた歴史であると認識している。

星野さんへの Q&A 要旨 質問者：齋藤雅治さん（コミュネット江南 代表）

【テーマ：地域の団体とセンターのつながりを考える】

◆Q1（齋藤）：センターのハードとソフトとの関係についてのお考えは？

◇A1（星野）：

当センターは、良く機能していると思っている。2007年、このセンターを立ち上げる前に、同じような状況で既に開設されていた埼玉県川口市のセンターのことを知った。そこではオープン前の1年以上、ワークショップをずっとやり続け、センターのオープン時にはずっと先まで利用予約が埋まっていた。うまい具合に、ハードとソフトが寄り添っている状況が埼玉では生まれていたと思う。自分は、それを「ソフト付きハード開発」とか「ハードでソフトを育てる」と呼んでいるが、ソフトとハードがぐるぐる回って相乗効果を生んでいくような関係が良いと考えている。

◆Q2（齋藤）：センター機能の一つ『翻訳活動』とは？

◇A2（星野）：

市民活動支援センターの重要な業務である『中間支援』は、もともと矛盾を抱えていると考えた方がよい。

市民活動とは、これまでの状況に『ノー』と言って、次の道を進んでいく活動。オルタナティブなものであるだけに、市民活動家はお役所に対し『あんたのやってること違ってる！』というスタンスのようなもの。そういう活動に対して、現体制の役所が金を出し、支援するセンターをつくるというのは、とても不気味な状況であると理解した方が良く思っている。

それではこの矛盾した状況の中で、僕はどんなことをしているのか？

本来なら、役所の活動も市民活動も公益的なものであり、同じ方向を向いているはずなのに、役所とは、オルタナティブなものを許さない存在。そのためセンターの人間は、そもそも役所とは全く違うアプローチ、全く違う判断という視点を持つことが大事。その視点を持って、利用者には、役所の言う通りの表現で素直（ストレート）に伝えず、市民活動家（相手）に合わせて言い換えることが翻訳活動。

自分はそれを『こうもり』とも言っている。役所と話すときはこちらの顔、市民活動家と話すときはあっちの顔を見せるといった具合でいいと思う。そもそも矛盾した状況にあるのだから。

（ただし、それぞれに良い顔をすることも違う。やはり、相手の想いや状況を知って話すことが大事であり、大変難しい仕事である。）

◆Q3（齋藤）：『アウトリーチ活動』についての星野さんのお考えは？

◇A3（星野）：

市民活動支援センターがアウトリーチをする場合、気を付けなければいけないのは、どんなスタンスで臨むのか、ということ。行政の視点が入ると、『変なことはしていないだろうか？』と監視役のようになってしまうがちであり、自戒が必要である。自分としては、おカネを「出す側」と「もらう側」とか、サービスを「提供する側」と「受ける側」という相対する関係性ではなく、同じ方向を向いた市民活動家の（＝地域に対してオルタナティブなものを求めて、なんとかしようとかあがいている）仲間たちというスタンスでアウトリーチしたいと考えている。

◆Q4（齋藤）：本日のメインテーマ『寄り添う支援・伴走支援』について

◇A4（星野）：

大変難しいお題……先ほど話した「こうもり」という立場で、翻訳作業をしながら団体と付き合っていくための自分自身の在り方……団体に伴走するためには次の視点が大事だと思っている。

1. 時代の趨勢を知る
2. 役所の読み
3. その市民活動団体が、本来流れていく先
4. その団体の性質

これらをつかむには普段の雑談がとても重要で、雑談の中で得た情報を、さらにネットで調べて確認したり、多様な視点から検証して、ようやく団体の実状がわかってくる。そして、ときには『あなたの言ってること、本当なの？』という突き放した視点も持ちながらつきあっていく……一般的な『寄り添う』ではないかもしれないが、『離れつつ、くつつく』感じというのが自分の考える寄り添う支援である。

◆Q5（齋藤）：センタースタッフとして働く注意点について

*公の施設利用を任せられるセンタースタッフ業務というのは、ある種、「権限」を与えられた存在といえる。その行使の際に気を付けなければならないことは？

◇A5（星野）：

（齋藤さんの質問からはちょっとそれるが）、市民活動は「やってみなけりゃわからない！」ということが非常に多い。そういった性格のものを、役所の施設利用要項通り、四角四面の判断をしてしまうと可能性の芽を摘んでしまうことになりかねない。

そうならないために大切なことは、地域をどうしたいか？というひとまわり大きな視点を持つことと、施設の本来ミッション・原点に返ること。センター利用の要綱や仕様書に書かれている内容を読みこめば、本来ミッションを実現するための可能性、隙間を必ず見つけて新たな展開を拡張できると思う。

市民活動のフロントを預かるものとして、そのために心がけたいのは、発注者（行政）が求める以上のデータを示し、活動が見える化していく努力。非常に時間がかかるし大変だが、うちのスタッフには、余計だと思われるくらいデータを収集し、分析してもらっている。